第二講　現代語訳・解釈・意味

一

問1　「まどろませたまふことかたし」の現代語訳として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　意識をはっきりお示しになることが難しい。
イ　お眠りになることが難しい。
ウ　うとうとなさることが確実である。
エ　横たわったまま長い時間を過ごされる。
オ　起きていらっしゃることが困難である。

問2　「心得てけり、とおぼすに、え堪へずしほたれ給ひて」の解釈として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　帝は、中納言が自分の心中を理解しているとお思いになるにつけ、こらえられずに涙で袖をお濡(ぬ)らしになって
イ　中納言は、帝はもしかしたら自分が唐の国に来て契った女のことを知っているのではないかと内心気にされて
ウ　帝は、中納言が風流を解する人だとお思いになって、こらえきれず后に会えない不満をくどくどとおっしゃって
エ　中納言は、比翼の鳥とは日本の遠山鳥だとお思いになって歌を詠んだものの、自信がなくてしょんぼりされて
オ　帝は、后に対する恋慕の情を中納言が分かってくれたとお思いになったが、我慢できず直接言葉でおっしゃって

問3「かくな言はせそ」の解釈として最も適当なものを次の中から選べ。

ア　こんな残酷なことを言わないでくれ。
イ　こんなでたらめなことを言ってはいけない。
ウ　こんな恨みごとを言われる筋合いはない。
エ　こんな泣きごとを言わせておいてはだめだ。
オ　こんな頼みごとは勝手に言わせておけ。

問4「おのれも慎まば、右大将のために悪しうもこそあれ。」の解釈として最も適当なものを次の中から選べ。

ア　私が身を慎むのは、右大将に具合の悪いことが起こってほしいと思うからだ。
イ　私が身を慎むことは、右大将のためにならないはずがない。
ウ　私が身を慎んだならば、右大将にとってよくないことになると大変だ。
エ　私も一緒に身を慎むと、右大将は気を悪くするに違いない。
オ　私が身を慎まないことに、右大将は機嫌を損ねるだろう。

問５　「うちかたぶきて過ぐし侍らんは、いとなめし」の意味として最も適切なものを次の中から選べ。

ア　経済的負担をお願い申し上げるのは、まったく不本意だ
イ　知らぬ顔をして通り過ぎましたなら、たいへんに失礼だ
ウ　被害をおかけするようになりますと、極めて心ぐるしい
エ　疑問に思いつつ日々過ごしますのは、とても堪えがたい

問６　次の傍線部を現代語訳せよ。

「とうまかりね。」とてこそやりてけれ。

二

問1　次の文章を読んで、傍線部の意味として最適なものを後の中から選べ。

「さて誰かれを送らせん」といふに、「いな、とくより心がまへせし」とて、菅の笠、竹の杖、その外、旅の調度などをみするに、家こぞりて感じつつ、日をえらびて出立せしむ。

ア　家の者は皆、その提案に賛成して、都合の良い日を選んで揃って出立することにした。
イ　家の者は皆、その旅支度の調度品に感心しつつ、天気の良い日を選んで出立した。
ウ　家の者は皆、その決意に心を動かされて、吉日を選んで出立させた。
エ　家の者は皆、その準備に感嘆して、日程を調整して供とともに出立させた。
オ　家の者は皆、その常の配慮を感じて、都合をつけて出立しようとした。

問2　次の文章を読んで、傍線部の意味として最も適切なものを後の中から選べ。

季札、帰り来りて、こひし剣をとらせんがために、徐君をたづぬるに、「はやくうせにき」といひければ、徐君がつかをたづねてぞ、こひける太刀をかけはべりける。

ア　すでに死んでしまった。
イ　どこかへ行ってしまう。
ウ　とっくに姿をかくした。
エ　もう無くしてしまった。

問３　次の文章を読んで、傍線部の解釈として最も適切なものを後の中から選べ。

少将の内侍、*台盤所の*御壺の楓（かへで）の木を見出して、「この楓に、初紅葉のしたりしこそ失せにけれ」といひたりけるを、頭の中将聞きて、「いづれの方にか候ひけむ」とて、梢（こずゑ）を見上げければ、人々もみな目をつけて見けるに、蔵人永継とりもあへず、「西の枝にこそ候ひけめ」と申したりけるを、…

*台盤所　清涼殿の一室で、女房たちの詰所。
御壺　壺のように小さく仕切られた前庭。

ア　どちらかの庭に楓の木があったそうです。
イ　どちらの部屋に少将の内侍がいらしたのか。
ウ　どちらかの側の梢を御覧になったようです。
エ　どちらの方角に初紅葉があったのでしょうか。
オ　どちらの部屋の人々が感動したのでしょうか。

問４　次の文章を読んで、傍線部の現代語訳として最も適当なものを、後の中から選べ。

※二人が云ふ。「この米、価(あたひ)たかく買はん。売れ」とて、金一ひら投げ出(い)だす。〈中略〉武士(もののふ)云ふ。「米の価わづかに、金一両出だされたるは、富貴の人の旅ゆくにもあらず。心はやりてばくち打ち、又盗みしてあぶれあるくか」と問ふ。村雲答ふ。「ぬす人也。※よんべ幸ひ得て、金あまたの※わらづとにあり。多きも煩はしとて、<u>いかでつかひ棄てんとす</u>」と云ふ。

注　二人…はん噲(かい)と村雲。盗人。
　　よんべ…昨夜。
　　わらづと…わらで編んだ物を包むもの。

ア　どうにかして使いきってしまうつもりだ
イ　どうしても使い捨てることができないだろう
ウ　どうやって使い捨てたらよいのだろう
エ　どうして使いきろうとするのだろうか

問5　次の文章を読んで、傍線部を現代語訳せよ。

男にいひけるやう、「津の国といふ所の、いとをかしかなるに、いかで難波に※祓へしがてらまからむ」といひければ、「いとよきこと。われももろともに」といひければ、「そこにはなものしたまひそ。おのれひとりまからむ」といひて、いでたちていにけり。

※　祓(はら)へ＝神に祈って穢(けが)れを除く神事。

三

問1　次の文章は、『住吉物語』の一節で、中納言が亡き妻との間の娘である対(たい)の君を入内(じゅだい)させることについて、北の方（継母）に相談するところから始まる。これを読んで傍線部の解釈として最も適当なものを、後の中から選べ。

かくしつつ明かし暮らすほどに、九月にもなりぬ。中納言、北の方にのたまふやう、「行く末は知らず、(注1)二人の女(むすめ)はありつきぬ。この対の君を、今年の(注2)五節(ごせち)に内裏(うち)へ参らせばやと思ふなり。同じ御心ならぬ、心憂さよ」とのたまへば、…

注　1　二人の女…北の方（継母）が生んだ二人の娘たちのこと。
　　2　五節…陰暦十一月、新嘗(にいなめ)祭・大嘗(だいじょう)祭の時に朝廷で行われた、五節の舞を中心とした行事。

ア　健康に育った
イ　結婚した
ウ　成人した
エ　宮仕えした
オ　美しくなった

問２　次の文章を読んで、傍線部にはどのような意味が込められているか、最も適当なものを後の中から選べ。

女、

人のあきに庭さへ荒れて道もなく蓬(よもぎ)茂れる宿とやは見ぬ

と書きて出だしけれど、もの書くべき具さらになかりければ、たゞ口うつしに、男、

誰(た)があきにあひて荒れたる宿ならむ我だに<u>庭の草は生ほさじ</u>

ア　足繁くここに通うでしょう

イ　情趣のある庭になるでしょう

ウ　花の時期が楽しみでしょう

エ　人の噂にはならないでしょう

オ　不実な人間だと思うでしょう

問3　次の文章を読んで、傍線部の具体的な意味として最も適切なものを後の中から選べ。

　この帝、世をしらせ給ひて後(のち)、世の中みな治まりて、今に至るまでそのなごりになむ侍りける。〈中略〉東宮におはしましける時、世のへだて多くおはしましければ、危(あや)ふく思(おも)ほしめしけるに、検非違使(けびゐし)の別当にて経成(つねなり)といひし人、直衣(なほし)に柏夾(かしはばさみ)して、白羽(しらは)の胡籙(やなぐひ)負ひて参りて、中門(ちゆうもん)の廊にゐたりける日は、いかなる事の出で来ぬるぞ、と宮の中、女房よりはじめて、隠れ騒ぎけるとかや。〈中略〉重く過(あやま)ちたる者の、おはします近きあたりに籠(こも)りたりければ、うち包みたりけるも、もし東宮に逃げ入(い)ることやある、とて参りたりけるなりけり。かやうにのみ危ぶませ給ひて、東宮をも捨てられやせさせ給はむずらむ、と思ほしけるに、殿上人にて衛門権佐行親(ゑもんのごんのすけゆきちか)と聞こえし人の、相よくするおぼえありて、いかにも天(あめ)の下(した)しろしめすべき由、申しけるかひありて、かくならびなくぞおはしましける。

注　この帝…後三条天皇（一〇三四～一〇七三）のこと。
世のへだて…妨げとなるもの。具体的には、東宮に敵対する勢力のこと。
検非違使の別当…検非違使庁の長官。
経成といひし人…源経成。一〇五〇年から一〇六四年まで検非違使の別当。
柏夾…冠の後方に垂らす纓(えい)を、非常時に折りたたんで留めるための道具。
衛門権佐行親……平行親。

ア　検非違使が武器をもって攻めてくるという難事をお思いになる。
イ　重罪を犯した者が東宮の御所へ侵入する危険性をお思いになる。
ウ　周辺の女房たちの落ち着かない様子から不安だとお思いになる。
エ　敵対者が東宮との対立をふかめるのではないかとお思いになる。
オ　東宮の位にあり続けることに困難があるだろうとお思いになる。

四 次の文章は、『増鏡』の一節で、後宇多法皇の病が重篤になったことが述べられた後に続く場面です。これを読み、後の問に答えなさい。

そののち御孫の(注1)春宮行啓(とうぐうぎやうけい)あり。世をしろしめさむ時の御心づかひなど、いま少し細やかに聞こえしらせ給(たま)ふ。宮は、(注2)先帝の御かはりにも、いかで心の限りつかうまつらんと、(a)あらまし思されつるに、あかず口惜しうて、いたう(b)しほたれさせ給ふ。

〈中略〉

心細ういみじとのみ思さるるに、正中(しやうちゆう)元年六月二十五日、つひに隠れさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。

〈中略〉

御四十九日は八月十日余りの程なれば、世の気色なにとなくあはれ多かるに、女院、宮たちの御心の中(うち)ども、朝霧よりも晴れ間なし。十五夜の月さへかき曇れるに、故院の御位の御時に、宰相典侍(さいしやうのてんじ)とて侍(さぶら)ひしは、雅有(まさあり)の宰相の女なり。その世の古き友なれば、同じ心ならんと思しやるもむつましくて、万秋門院のたまひつかはす。

　(A)仰ぎ見し月もかくるる秋なればことわりしれとくもる空かな

いとあはれに悲しと見奉りて、御返し、宰相典侍、

　(B)光なき世はことわりの秋の月涙そへてやなほくもるらん

(注1)　春宮(とうぐう)　後二条天皇の皇子・邦良(くによし)親王。

(注2)　先帝　邦良親王の父・後二条天皇。

問1　傍線部（a）（b）を現代語訳しなさい。

（a）＝

（b）＝

問2　和歌（A）（B）について、比喩表現を踏まえて現代語訳しなさい。

（A）＝

（B）＝

【第二講】

〔模範解答〕

一

問1　イ　問2　ア　問3　エ　問4　ウ　問5　イ

問6　早く退出してしまえ

二

問1　ウ　問2　ア　問3　エ　問4　ア

問5　あなたはいらっしゃいますな。私が一人で参ります

三

問1　イ　問2　ア　問3　オ

四

問1　(a)　かねてからお思いになっていた

(b)　涙を流しなさる

問2　(A)　仰ぎ見た月が隠れるように、お慕いしていた後宇多法皇が亡くなった秋なので、悲しみのあまり心が曇るという道理を知れと曇る空であるなあ

(B)　後宇多法皇が亡くなり、光がない世の中では曇るのが道理である秋の月が、人々の悲しみの涙も加わり、よりいっそう曇っているのだろうか

〈現代語訳〉

二

問1 「さて誰をお供させせようか」と言うと、「いや、すでに心の準備はしていた」と言って、菅の笠、竹の杖、その他、旅の道具類などを見せると、家の者は皆（、その決意に）心を動かされて、吉日を選んで出立させた。

問2 季札は、帰ってきて、（徐君が）欲しがった太刀を与えるために、徐君を尋ねたところ、（ある人が）「すでに死んでしまった」と言ったので、徐君の墓を訪れて、欲しがっていた太刀を（お墓に）かけました。

問3 少将の内侍が、台盤所の前庭の楓の木を部屋の中から見て、「この楓に、初めて紅葉していた葉がなくなったよ」と言ったのを、頭中将が聞いて、「どちらの方角に初紅葉があったのでしょうか」と言って、梢を見上げたので、人々もみんな目を向けて見たが、蔵人永継がすぐに、「西の枝でございましたでしょう」と申し上げたので、…

問4 二人（＝はん噲（かい）と村雲）が言う。「この米を、高値で買おう。売れ」と言って、金一枚を投げ出す。〈中略〉武士が言う。「米の値段がわずかなのに、金一両出されたのは、富貴の人が旅をしているのでもない（ように見受けられる）。勇んで博打をして、あるいは盗みをして暴れ回っているのか」と尋ねる。村雲が答える。「盗人である。昨夜幸運を得て、たくさんの金がわらで編んだ物を包むものの中にある。（あまりに）多いのも煩わしくて、どうにかして使いきってしまうつもりだ」と言う。

問5 夫に言ったことには、「津の国というところが、たいそう美しいらしいので、なんとかして難波にお祓いをしがてら参ります」と言ったところ、「とても良いこと。私も一緒に」と言ったので、「あなたはいらっしゃいますな。私が一人で参ります」と言って、出かけて行った。

三

問1 このように明かし暮らしている間に、九月になった。中納言が、北の方におっしゃることには、「将来はわからないが、二人の娘は結婚した。この対の君を、今年の五節に宮中へ参内させたいと思うのだ。（あなたが私と）同じお気持ちでないことが、つらいことよ」とおっしゃるので、…

問２　女が、

人のあきに…＝人に飽きられたので、秋になって庭までも荒れて、道もなく蓬が茂っている家だと見てわからないのか、いや、わかるはずだ

と書いて出してきたけど、何か書ける道具がまったくなかったので、ただ口頭で、男が、

誰があきに…＝誰に飽きられて荒れた家なのだろう。私だけでも庭の草は生えさせないだろう〔＝足繁くここに通う〕

問３　この帝〔＝後三条天皇〕が、天下を治めなさって後、世の中はみな治まって、現在に至るまでその影響が残っているのでした。〈中略〉（後三条天皇が）皇太子でいらっしゃった時、皇太子に敵対する勢力が多くいらっしゃったので、（東宮の位にあり続けることを）危うくお思いになっていたところ、検非違使庁の長官の源経成といった人が、直衣に柏ばさみの格好で、白羽の胡簶を背負って参上して、中門の廊下に座っていた日は、どのようなことが起こったのか、と宮中の中が、女房たちをはじめとして、身を隠して大騒ぎしたとかいうことだ。〈中略〉重罪を犯した者が、（東宮が）いらっしゃる近くに逃げこもっていたので、包囲したのだが、もしかして東宮御所に逃げ込むことがあるかもしれないと、参上したのであった。このように（東宮は何かある度に）危うくお思いになって、東宮の位も見捨てられてしまうのではないだろうか、とお思いになったが、殿上人で平行親と申し上げた人が、占いを上手にするという評判があって、まさに天下を治めなさるに違いないということを、（東宮に）申し上げた甲斐があって、このように（後三条天皇は）並ぶものがいない（素晴らしい天皇な）のでいらっしゃった。

四　その後（後宇多法皇の）御孫の東宮〔＝邦良親王〕のお出ましがある。世をお治めになる時の御心がけなど、もう少し細やかに申し上げ知らせなさる。東宮は、先帝〔＝後二条天皇〕の御代わりにも、なんとかして心の限りお仕え申し上げようと、かねてからお思いになっていたので、もの足りず残念で、たいそう涙を流しなさる。

〈中略〉

（後宇多法皇は）心細く悲しいとばかりお思いになるが、正中元年六月二十五日、とうとう崩御された。御年五十八歳になりなさっていた。後宇多院と申し上げるのであろう。

〈中略〉

御四十九日は八月十日あまりの頃なので、世の中の様子がなんとなくしみじみとした感じが多いので、女院や、宮たちの御心の中は、（悲しみで）朝霧よりも晴れ間がない。十五夜の月まで曇っているので、故院の治世の御世に、宰相典侍といってお仕えした人は、雅有の宰相の娘である。その御世の古い友であるので、同じ気持ちだろうと想像しなさるのも慕わしくて、（宰相典侍は）万秋門院に手紙を送りなさる。

仰ぎ見し…＝仰ぎ見た月が隠れるように、お慕いしていた後宇多法皇が亡くなった秋なので、悲しみのあまり心が曇るという道理を知れと曇る空であるなあ

たいそうしみじみと悲しいと拝見して、お返事を、宰相典侍が

光なき…＝後宇多法皇が亡くなり、光がない世の中では曇るのが道理である秋の月が、人々の悲しみの涙も加わり、よりいっそう曇っているのだろうか